

(様式 1)

令和5・6・7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	綾部市立吉美小学校							校長名	塩尻 竹弘
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	135 名
学級数	1	1	1	1	1	1	3		
事業担当教員名	細辻 浩介								
① 中学校区で 目指す子ども像	ブロック教育目標 自立と貢献 ～夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 子どもの育成～								
	ブロック 目指す子ども像 ※下線部太字…重点 夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 綾中ブロックの子 ・夢をもち（将来を見据え、主体的に学び表現する子）【展望する力】 ・仲間とともに（豊かな心をもち、自他ともに大切にできる子）【つながる力】 ・未来を切り拓く（心身ともに健康で、実践力と行動力のある子）【挑戦する力】 綾中ブロックの子（誇りと郷土愛をもち、地域とかかわる子）【貢献する力】								
② 目指す子ども像	めざす学校像 「人を大切にする子ども・教職員のいる学校」 ◆ 子どもが笑顔で登校し、保護者が安心して登校させる学校 ◆ 地域が進んで応援したくなる学校 ◆ 教職員が生き活きと働く学校								
	・相手の気持ちや立場、状況等を豊かに想像し、人を大切にすることができる。 ・確かな学力（基礎、基本を確実に身に付け、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決する資質や能力）を身に付けている。 ・自分の思いや考えを、理由や根拠を明らかにして伝えることができる。 ・話をしっかりと聞いて考えることができる。 ・自己理解（自分の性格、行動等を自分自身が納得して受け止めている状態）ができる。 ・様々な活動に粘り強く取り組むことができる。 ・活動後には振り返りを行い、次の目標を立てたり、意欲を高めたりすることができる。 ・どうすれば自分自身がよりよくなるかという見通しを持ったり、自己調整の方略を知ったりし、課題の解決に向けた活動に主体的に取り組むことができる。								

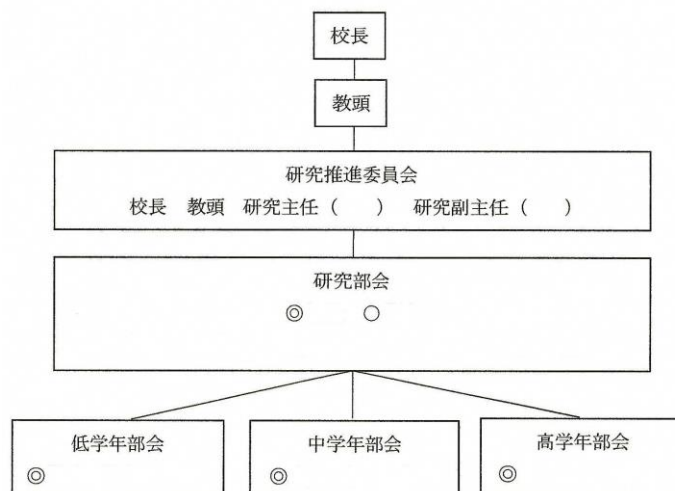
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・自分の思いや考えについて、理由や根拠を明確にしながら分かりやすく伝えることのできる児童がいる。 ・性格や行動における自己理解だけでなく、学習内容における自己理解（分かる、分からない）ができている。 ・国語科や算数科等の教科学習において、基礎・基本の力に課題のある児童がいる。 ・話を聞いて内容を理解することはできるが、感想を持ったり考えを深めたりすることに課題が見られる。 ・対話や協働を通して、問題を解決する経験が少ない。 ・与えられた課題に取り組むことはできるが、自分で課題を設定して取り組む（自主学習など）といった主体性は十分とは言えない。 ・自分の中で、すべきことが明確になっていても、粘り強く取り組むことが難しい児童がいる。 ・活動を振り返ることはできるが、その内容を次に活かすことが十分にできない。 ・「自律的に学ぶ」ことを重視した単元（授業）設計ができておらず、どの学習においても、基本的には、教師からの問いに答える形で進められている。 ・家庭学習（宿題）では、取り組み方が煩雑になってしまう児童がいる。 ・相手の気持ちをよく考えずに発言したり行動したりすることにより、トラブルに発展してしまうことがある。
④ 目指す子ども像に達するための仮説	・日常生活の中で、「人を大切にする」ことへのイメージを具体的に持たせることや教職員が児童の気持ちや立場、状況について豊かに想像して接する姿を見せること、人権学習を充実させること等により、児童の人権感覚を高めることができるのではないか。 ・確かな学力を身に付けさせるにあたり、1時間1時間の授業の中で、理解の状況を確認し、手立てを行うことにより、基礎・基本の力が定着してくるのではないか。 ・各教科・領域等の授業の中で、適切な支援を行いながら、自分の考えを持つことや話す経験を積ませていくことにより、分かりやすく考えを伝える児童を育成できるのではないか。 ・思考と対話を繰り返す学習過程を大切にしながら課題解決型の授業を展開していくことにより、対話的・協働的に学ぶ態度が身に付くのではないか。 ・「振り返り」→「自己理解」→「メタ認知能力を働かせた自己調整」のサイクルを大切にしながら、様々な教育活動を展開することにより、「自律的に学ぶ」にあたって、必要な態度が身に付くのではないか。 ・粘り強く取り組む経験を積み、その良さを実感させることにより、自分自身をよりよくしようとする姿勢が育つのではないか。 ・自分で学習課題を設定させたり課題解決の方法を選択させたりする学習活動を取り入れることによって、「自律的に学ぶ」ことへのイメージを持たせることができるのではないか。

令和7年1月21日現在

【1 研究主題】

「よりよい問題解決できる児童の育成」
 ー思考と対話を繰り返し、協働的に学ぶ算数科の授業づくりを通してー

【2 研究組織体制】



※ 研究の方法

1 授業研究 ※教科：算数科 ※全学級公開（事前研究会・事後研究会を含む）

児童の「思考」と「対話」を繰り返したり、充実させたりしながら、問題を解決していく授業づくりについて学び合う。

2 各学年の研究 ※グループ学年会（毎週月曜日）や研究部会（月1回）等で実践を交流・報告

(1) 低学年

繰り返し練習することによって、「分かった」「できた」という経験を積み、自力で問題が解けることに重点を置く。

(2) 中学年

今日の授業が分かったかどうか、どうやったら問題が解けたか等、問題解決の経験を次の学びに活かそうとすることに重点を置く。

(3) 高学年

問題解決に必要な既存の知識やこれまでの学習経験を活かしながら、よりよく解決していくことに重点を置く。

【3 具体的な取組内容】

- ・日常生活の中で、「人を大切にする」ことへのイメージを具体的に持たせることや教職員が児童の気持ちや立場、状況について豊かに想像して接する姿を見せること、人権学習を充実させること等により、児童の人権感覚を高める。
- ・1時間1時間の授業の中で、理解の状況を確認し、手立てを行い、基礎・基本の力を定着させる。
- ・各教科・領域等の授業の中で、適切な支援を行いながら、自分の考えを持つことや話す経験を積み、分かりやすく考えを伝える児童を育成する。
- ・「思考」と「対話」を繰り返す学習過程を大切にしながら課題解決型の授業を展開し、対話的・協働的に学ぶ態度を身に付けさせる。
- ・自律的に学ぶ力を身に付けさせるために、「振り返り」→「自己理解」→「メタ認知能力を働かせた自己調整」のサイクルを大切にする。
- ・粘り強く取り組む経験を積み、その良さを実感させることにより、自分自身をよりよくしようとする姿勢が育てる。
- ・自分で学習課題を設定させたり課題解決の方法を選択させたりする学習活動を取り入れることによって、「自律的に学ぶ」ことへのイメージを持たせる。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4～6	30	自分の考えた道すじをほかの人の視点から考えて、見つめ直すほうだ。	自己調整	

4～6	31	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。		
4～6	32	課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。		
4～6	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていつている。		

*** 5・6の分析の項目は削除しています。**

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

【学力に課題のある児童】

・ A

個人カルテから、非認知能力や学習の方法に関する調査における回答値は高い。「好奇心」の値が高いことから、「知りたい」や「分かるようになりたい」という思いは強いと考えられる。一方で「表層理解」や「リハーサル」の値も高い。別室での個別指導を継続するとともに、学ぶ楽しさ・考える楽しさが感じられるように、指導や支援を工夫していく。

・ B

個人カルテから、非認知能力に関する調査における「計画性」の回答値が昨年度より下がっており、その値も低い。一方で、「チャレンジ精神」の値は高い。学習面において、どのように取り組めば力を伸ばすことができるかということを、別室での個別指導において、ていねいに指導・支援していく。

【学力の伸びに課題のある児童】

・ C

個人カルテから、非認知能力における「計画性」及び学習の方法における「主体的・対話的で深い学び」の回答値が、他の項目と比較すると、昨年度より下がっている。目標に向けて頑張っている本児の良さを生かしながら、単元ごとに内容の理解度を確認し、必要に応じて個別に指導・支援を行う。

・ D

個人カルテから、学習の方法に関する調査における回答値に大きな変化は見られない。非認知能力における「学びに対する積極性」の値は、昨年度と比較すると下がっているが、授業では意欲的に問題解決に取り組める時もある。単元ごとに内容の理解度を確認し、必要に応じて個別に指導・支援を行う。

【学力に課題のある児童】

・ E

個人カルテから、非認知能力に関する調査における「計画性」の回答値が昨年度より下がっており、その値も低い。日々の授業において内容の理解度を確認するとともに、学習面において、どのように取り組めば力を伸ばすことができるかということを、個別に指導・支援していく。

【学力の課題が大きいわけではないが、質問調査の回答値が低かった児童】

・ F

個人カルテから、非認知能力や学習の方法に関する調査における回答値が低い。普段の様子から、自分の考えを表現することもほとんどないため、学習に対する思いを個別に聞き、指導・支援に生かしていく。

4年

【学力に課題のある児童】

・ G

個人カルテから、非認知能力や学習の方法に関する調査における回答値に特徴は見られない。一斉指導では、内容の理解が十分でないことがあるため、日々の授業において理解度を確認するとともに、必要に応じて個別に指導・支援を行う。

・ H

個人カルテから、非認知能力や学習の方法に関する調査における回答値に特徴は見られない。引き続き、別室での個別指導において、ていねいに指導・支援していく。

【学力の課題が特に見られるわけではないが、質問調査の回答値が低かった児童】

・ I

個人カルテから、非認知能力に関する調査における「好奇心」や「心理的安全性」、学習の方法に関する調査における「主体的・対話的で深い学び」の回答値が低い。自分の思いや考えを伝える力を伸ばす指導・支援を行うとともに、学ぶ楽しさを味わわせる授業づくりを心がける。

集団としての具体的な指導・支援方法

A

- ・ 「学ぶ意義」を感じさせるとともに、自分の力を伸ばすことに関心を持たせる。
- ・ 粘り強く取り組むと自分の力が伸ばせることを実感させる。
- ・ 内容を自分で考えて自主学習に取り組むなど、自分に適した計画や内容を考えて学習する経験を積ませる。

B

- ・ 「学ぶ意義」を感じさせるとともに、自分の力を伸ばすことに関心を持たせる。
- ・ 粘り強く取り組むと自分の力が伸ばせることを実感させる。
- ・ 内容を自分で考えて自主学習に取り組むなど、自分に適した計画や内容を考えて学習する経験を積ませる。

C

- ・ 学習の「振り返り」の記述を通して、自己理解（分かる・できた・得意、分からない・できなかった・苦手等）を促す。
- ・ 自分に合った目標を立て、その達成に向けて粘り強く取り組む力を育てる。

【8 仮説の修正】

※ 追加

- ・ 自分に適した計画や内容を考えて学習する経験を積ませることによって、「自己理解→自己調整」といった思考の流れができ、学力の向上につながるのではないかと。

【9 具体的な取組内容の修正】

なし

【10 児童の変容（普段の様子から）】

普段の様子からは、変化を十分に見取ることが難しかったため、2学期の評価テストや質問調査（自己調整に関わる項目のみ）においても、児童の実態把握及び分析に努めた。【7 分析結果を～】では、学力の課題が大きい児童を対象としているためか、評価テストの結果や質問調査の回答値に大きな変化・向上は見られなかった。また、課題（宿題）を最後までやり切らせたり、間違えている問題を直させる個別支援を行ったりすることを通して、認知能力の向上を図ったが、自分の課題に応じて、計画的に学習を進める指導・支援までは十分に行うことができなかった。

【11 3年次の研究構想】

「主体的・対話的で深い学び」を大切にしたい授業づくりを通して、「認知能力」を高める研究を継続していく。また、その中で、子どもたち一人一人の「非認知能力（自己調整を含む）」を発揮させることを意識し、「認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ教育」の実現に努めていく。